HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	青年団における地域活動の展開過程
Author(s)	大坂, 祐二
Citation	北海道大學教育學部紀要, 62, 83-110
Issue Date	1994-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/29418
Type	bulletin (article)
File Information	62_P83-110.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

青年団における地域活動の展開過程

大 坂 祐 二

A Study on the Development of Youth Activity for the Local Community

Yuji OHSAKA

目　　次

はじめに …… 83
第1章　1970年代以降の青年団体活動と青年団研究 …… 84
第1節　青年団の地域づくり活動 …… 84
1．青年団運動の「第2の高揚期」と「ふるさと運動」 …… 84
2．日青協の「新しい地域づくり運動」と活動家の主体的力量 …… 85
3．80年後半からの地域づくり活動への関心の高まり …… 86
4．小　　括 …… 86
第2節　笹川孝一の青年団活動研究 …… 87
1．地域づくり活動の展開 …… 87
2．活動家の自己形成過程 …… 88
第3節　本論の構成 …… 88
第2章　農業・農村青年の自立の課題と地域活動 …… 90
第1節　訓子府青年団の組織と特徴 …… 90
第2節　青年団の活動基盤の変化 …… 92
第3節　訓青協における地域活動の位置づけ …… 94
第3章　青年団体活動への意識化とリーダーの成長過程 …… 98
第1節　リーダーへの成長過程 …… 98
第2節　リーダーの「ゆきづまり」 …… 100
第3節　リーダーとしてのあゆみ …… 101
第4節　小　　括 …… 103
第4章　地域活動の展開過程 …… 103
第1節　研修所問題と宣伝・啓蒙の対象としての地域 …… 104
第2節　イベント活動と地域の一員としての青年団 …… 106
第3節　実行委員会方式と住民諸階層との交流 …… 107
まとめと今後の課題 …… 108

はじめに

本論文は，青年団における地域活動の展開過程を，青年が自分自身と地域の関わりを見直し，地域の人々への働きかけと相互の交流を豊かにつくりだしてゆく過程として意味づけてゆくことを課題とする。

「地域を基盤にした大衆的，網羅的な青年の自主組織である」青年団は，地域づくりに重要な

役割を果たしている組織のひとつである。青年団の前身は中世から江戸時代の村落共同体における「若者組」であるとされ，戦前においては“ムラの生活集団”として，また“行政の補助的機関”として地域社会と深く関わっていた。戦後においても，50年代，60年代の生活近代化，平和問題，公害問題など個別の地域課題から，さまざまな地域全体の活動の統一的な取り組みへ，反対運動から積極的な「地域計画」づくりへと，その活動をすすめてきた。

特に戦後の青年団において地域課題への取り組みは，同じ地域に住む青年が共通に抱える課題，共感しあえる課題をほりおこし，その解決をはかる実践を通じて，青年らしく，人間らしく生きようとする，青年運動としての側面が強調されてきた。地域づくりに取り組む青年たちの多くは，仲間とともに「住みたくなる町」を描き，そこに自らの将来を重ねている。また，町づくりのための諸々の課題への取り組みは地域の行政や，より広い政治的・社会的な問題へも目を向けさせる。こうした中で地域の産業，地域の自治の担い手として成長しつつあるのである。

しかし，こうした過程は社会教育研究における青年団活動の研究の中で，必ずしも意識して取り上げられている訳ではない。そこで，以下ではまず，青年団活動の全国的な動向と先行研究を検討し，そのうえであらためて課題にふれたい。

第1章　1970年代以降の青年団活動と青年団研究

第1節　青年団の地域づくり活動

青年団における地域活動は，社会活動や地域づくり活動などとも言われ，用語としては必ずしも一定してない。そこで，青年団活動の中で地域づくりへの関心高まりが見られる1970年代以降の動向から，「地域づくり活動」の意味するところを確認してゆこう。

1．青年団運動の「第2の高揚期」と「ふるさと運動」

1956年には185万（文部省社会教育局調べ，以下同様）をかぞえた青年団員は，15年後の71年には62万人と3分の1ほどにおちこんだ。しかし，73年頃から団員減少の停滞ないし微増が指摘されるようになる。数字の上では，75年には51万人，78年には49万人と減少は続いているものの，かつてのような急激な減少は止まりつつあるように見えた。

こうした動向について那須野隆一は，高度成長から低成長への転換の中で新たに息を吹きかえしている青年団では，グループ化＝機能集団化の傾向を克服し，「住みたくなる町づくり」と「たまり場」づくりを展開しており，そのことは生産物と労働力を使い捨て人間連帯を喪失させていたそれまでの生活を見直し，〈ふるさと〉と〈ふれあい〉を取り戻そうとすることを意味する，と指摘した[1)]。

那須野は1960年代半ばから名古屋サークル連絡協議会（名サ連）をはじめとする名古屋の勤労青年たちと関わっていたが，青年団における上のような動向は，名古屋の青年たちの活動と通ずるとして，そこでの学習活動を理論化して「生い立ち学習」「たまり場学習」などとして提起した。那須野の提起は，著書『青年団論』や全国青年問題研究集会（全国青研），社会教育研究全国集会，教育科学研究会の大会などを通じて，全国の青年サークルや青年団に少なからぬ影響を与えた。

こうした状況をとらえ日本青年団協議会（日青協）は1978年，「学習しなければ青年団運動は高まらない」として「たまり場において団員の“生活と人格のまるごとのふれあい”をおこないながら，よもやま話から系統的な学習にいたるまでさまざまな形でおこなわれる『たまり場学習』」の推進を方針化した。また，1979年の第24回全国青研集会では，70年代後半の青年団運動の高ま

りをとらえ「第2の高揚期をむかえつつある」という評価がされた。

しかし，「たまり場学習」の方針は長くは定着しなかった。81年度の方針では「たまり場学習」の言葉はみられるが，それは方針の柱ではなくなっている。また「第2の高揚期」との評価も，82年の第27回全国青研の基調報告の中で「とても第2の高揚期とはいいがたく必ずしも楽観できる状況ではない」と早くも打ち消されている[2)]。

これに先立って笹川孝一は，70年代後半の青年団運動の高揚について，政府・独占による「ふるさと運動」「ボランティア運動」の展開がひとつの要因になっており，この高揚が必ずしも楽観できるものではないことを指摘していた[3)]。

元木洋は，ふるさと運動を1973年という早い時期から提唱し取り組んでいた秋田県連合青年団の例をあげ，青年の地域活動や「社会参加」が「青年の自主性にもとづいておこなわれるのではなく，行政によって推進されるようになった」ことを指摘する[4)]。秋田県連青が提唱したふるさと運動は，村の青年がふるさとの自然や文化を見直し，出稼ぎや離村をくいとめ村に活気を取り戻すことをねらいにしていた。県は1976年からふるさと運動に補助金を出すようになったが，それは「三全総」[5)]と整合性を持った県の総合開発計画と青少年育成総合基本計画の一環として政策化され，地域づくりの主体の育成を具体化しようとするものであった。

2．日青協の「新しい地域づくり運動」と活動家の主体的力量

日青協は，こうした政策動向に対して「『三全総』は，中央のための地方として，従来の外来型開発と発想が同じであり，過疎・過密を解消もしなければ地域問題を解決もしていません」(81年度方針)，「この〔総理府青少年問題審議会意見具申「青少年と社会参加」1979年――筆者注〕『社会参加』は，社会参加の目的の立案と決定に関する社会参加でもなく，行政や学校，企業の決めた目的の実現過程への参加にすぎない」(第25回青研基調報告）などと指摘。「地域住民が自分の頭で考え，自分の足で歩いて手に入れた街づくり“内発的発展”を大切にして，これを新しい地域づくりの基軸と」することを方針とした（81年度方針)[6)]。

また青研集会でも，各種の青年意識調査が，「日本の経済成長による『豊かさ』が，青年そのものの豊かさに実感としてはつながらず，相対的な貧困感をもつ」[7)]ことや，多くの青年が社会活動，集団活動への志向をもちながら，「現存する青年組織を活用できていない」[8)]ことを明らかにしていることを示しながら，「青年団を発展させる社会的な基盤，客観的な基盤はすでに出来あがっています。残されているのは，青年自身の主体的力量です」[7)]との呼びかけがなされた。

さらに81年度方針では，「青年団の力量をたかめ，よりよい地域づくりの担い手となるため」，団員倍増運動が提唱された。日青協は1974年から，「青年団の命運をかけ」日本青年館新館建設の募金運動に取り組んでいた。この運動を通して「青年団運動が地域社会から正しく理解され，質・量共に大飛躍を実現できた組織が数多く出現」[9)]した成果をもとに，ひきつづき組織強化・拡大をはかるものとして団員倍増運動が提唱されたのである。したがって，単に団員拡大を行うのではなく，地域を相手に日頃の活動を点検し，団員自らが意識を高める運動であることが強調された。

ところで同じ頃，「青年の主体的力量」に関わって，活動家自身の「生活者としての主体性」の問題が指摘されていた。

1981年3月の第26回全国青研参加者を対象にしたアンケート調査によれば，活動家の職業は農林業13.3％，自営業9.3％に対して会社員33.9％，公務員22.3％となっている。一方，これらの

青年の「家の職業」は農林漁業が61.8%と圧倒的に多く，活動家のほとんどがいわゆる「在村通勤青年」である。これに収入やその使い道，労働時間の分析をあわせて，報告は次のように指摘する[10)]。

「活動家自身の生活が，基本的な生活の部分を『家の職業』に依存して，生活の自律性を脆弱にし，生活意識そのものが基本的な問題から切り離して形成されているのではないかと思われます。つまり，『食う』ための問題から，生活時間や収入に見合った生活をどうつくっていくかの問題に変化してしまうのではないかということです。」（青年団研究所報第2集 p. 19）

「新しい地域づくり運動」で課題発見学習としての「地域問題地図づくり」，青年・地域住民の生活実態や要求を正しくつかむためのたまり場学習や生活記録などの学習活動が求められていたのも，青年の生活意識が生活の基本的な部分から切り離され，地域の課題をとらえられない困難を克服しようとするものと言えるだろう。

3．80年代後半からの地域づくり活動への関心の高まり

国際青年年であった1985年度の日青協方針を見ると，基本目標として①組織の強化・拡大運動の推進，②新しい地域づくり運動の推進，③平和運動の推進，の三つが設定されている。「新しい地域づくり運動」では1）地域の産業，経済に目を向けよう，2）地域住民の連帯を強めよう，3）地域の環境に目を向けよう，4）地域の政策づくりに参加しよう，の四つが提起されており，先に挙げた81年の方針と比べると，項目が整理されているだけでなく，次のような点が特徴的である。ひとつは，81年度方針では「新しい地域づくり運動」と並んでいた「農林漁業に対する取り組み」，特に「日本農業を守り発展させる」取り組みを「地域づくり」の中に位置づけたこと。二つは，青少年・婦人・高齢者など住民各層の課題への取り組みを「住民の連帯」として位置づけたこと。三つは，そうした各層の要求実現を「政策づくりへの参加」へ高めようとしていること。総じて，これまでの「社会的な期待に応え，青年が地域づくりの先頭に立つ」といった論調は弱まり，住民各層と連携し，地域の実態に即しながら要求の具体化をはかることを呼びかけている[11)]。

4．小　　括

これまで見てきたことから，次の点を確認しておきたい。

第1に，70年代後半以降の青年団における地域づくり活動は，青年の自主的な取り組みとして進められるのか，開発政策と関わって行政によって進められるのかの，せめぎあいの中にある。

第2に，地域づくり活動を青年の自主的な取り組みとして進めうる主体的力量の形成が問われているが，在村通勤青年の生活意識は，生活の基本的な問題から切り離されて形成されていることが危惧されている。

第3に，80年代後半の地域づくり運動では，青年と住民各層とが連携した地域の実態に即した取り組みが求められている。

現段階において地域づくり活動を進める視点として，地域づくり活動を開発政策などによってすすめられる「地域壊し」に抗する活動として，住民各層が連携して進められるものととらえる

ことが必要だろう。また，青年にとって地域づくりを主体的に進めるうえで，自分自身の生活の見直しが欠かせないが，住民各層の連携のためには，さらに各層の抱える課題の相互理解が必要になると思われる。

第2節　笹川孝一の青年団活動研究

前節で70年代後半以降の動向から導いた地域づくり活動を進める視点は，青年団活動の研究においてどのように表れているだろうか。ここでは，1980年ごろに青年団の地域づくり活動や青年団活動家の自己形成についての論稿を出している笹川孝一を取り上げる。なお，青年教育における学習論としては那須野隆一の「生活史学習」論がよく知られており，社会教育の理論と実践に与えている影響は青年団や青年サークルだけにとどまらない。一方，笹川は「自己形成史学習」について論じているが，これは「生活史学習」と共通する論理を持っていると理解でき，地域づくり活動についても論じている笹川を取り上げることとした。

1．地域づくり活動の展開

先にみたように，70年代後半の青年団運動の高揚について，政府・独占によって展開されている「ふるさと運動」がひとつの要因になっていることを指摘したのは笹川であった。1983年の論文「青年団活動における地域づくり活動の展開」[12)]では，70年代半ばまでの全国青年問題研究集会に出されたレポートの検討をふまえ，青年団における地域活動の到達点が次のように指摘される。すなわち，1960年代までの実践は「全体として個別課題へのとりくみが多く，また国や県レベルの問題については反対運動的な色あい」が強かった。しかし1970年代になると，石油ショック以後の経済不況という現実にたって，それまでの蓄積のうえに「『地域づくり』を正面から意識したとりくみが広がりはじめて」いるという。また，地域づくり活動が正面から取り上げられる経過から言えば，「『地域づくり』の基本精神は，大企業の地域支配に抗して地域住民の『いのちとくらしを守る』地域づくりをすすめることである」と指摘する。前節で述べた第1の視点と相通じるものである。

第3の点に関わっては，「『地域づくり』へのとりくみの視点」として，ひとつは地域づくりが，「青年が，現在の生活を，より平和で民主主義的でゆたかなものにするため」に，利害を共にする人たちと共同行動をとる必要があることを指摘する。また，「青年が，いま直面していなくても将来ぶつかるであろう生活問題を他の人々の生活のなかに見出し」「いまの生活と，将来へのみとおしをゆたかでたしかなものにする」としている。これは，「生活の問題を意識せずに，安易に，ムード的にとりくんでいるものも少なく」ないなかでは，くりかえし確認すべき視点だろう。しかし，現実の地域づくりの中では，生活をより豊かにしようとしているはずの取り組みが住民どうしの対立を生んだり，将来ぶつかるであろう生活問題であっても，なかなか我が事として受けとめられず無関心を装うことは，よく起こることではないだろうか。青年の成長にとっての地域活動の意義は，こうした点を克服し，地域との関わりを「ゆたかでたしかなものにする」ことにあると思われるのである。

そうであれば，第2の点に関わって，「地域づくりと青年の成長の統一的実現」のために「青年団活動全体のていねいな組みたてを」主張することは，必ずしも充分であるとは言い難い。ここで「活動全体のていねいな組みたて」とは，「社会問題・地域問題にストレートには眼をむけてゆきにくくなって」いる青年たちでも，仲間や先輩との信頼関係をバネに地域問題に取り組ん

でゆく傾向が強いことから，そうようなていねいな指導をすることが求められていることを言っている。しかし，仲間との信頼関係から地域問題への，いわば飛躍の過程が，ここでは明らかになっていない。では笹川は，地域づくり活動を通じた青年の成長をどのように見ているだろう。

2．活動家の自己形成過程

笹川の示す活動家の自己形成過程[13)14)]は，次のようなものである。活動家への入口は，上でも述べた仲間や先輩との信頼関係である。それ以前では解決すべき問題現象が自覚されていても，解決の手段がとらえられずにいる。それが仲間からの働きかけによって，問題解決の見通しが見えてくるのである。しかし，ここではまだ「現象における一般性と特殊性を区別することができない。」[13)]「まね」や「あこがれ」にもとづく実践は，ここで「ゆきづまり」を経験する。彼には「自分（たち）が青年団活動をすることは，自分やなかまの人生にとって，日本国民と人類の歴史にとってどんな意味があるのか」を，「生活を批評し事実の時間的な継起のなかに，生活・実践の発展の像をとらえる」[14)]ことが求められる。

ここでは「青年団活動と自分（たち）の人生との関係をはっきりさせる」[14)]ことが強調されているが，自分（たち）と地域との関係については意識して追求されているわけではない。しかし，青年たちがやがて成人として地域の生産・労働・生活を担うのであれば，この点を位置づけることは重要であろう。

また，活動家がつきあたる「ゆきづまり」は，直面している問題によって内容はさまざまであると思われる。つまり，そこでは「一般性と特殊性の区別」というよりも，直面している問題において一般性と特殊性がどのように個性的に表れているか，が問題になるのではないだろうか。

第3節　本論の構成

以上の検討をふまえて，冒頭の課題に接近するために，次章以降を次のように構成する。

笹川は「地域づくり活動」を「青年団員が団員以外の人に働きかけておこなう活動」としていたが，ここでは「地域づくり活動」をふくむ「地域活動」を「青年団活動の中で何らかの形で地域住民への働きかけや相互の交流をおこなう活動」として広くとらえておく。どのような働きかけを行うかよりも，地域住民との関わりのなかで青年が地域をどうとらえ，自分と地域の関わりをどのように見ているかを検討したいためである。事例として取り上げる訓子府町青年団の活動を念頭におくなら，具体的には，地域住民への広報・宣伝，青年活動への住民の参加，住民の諸活動への青年の参加といった形態が考えられる。

第2章では，訓子府の青年団でこうした地域活動が活動全体の中でどのような位置にあり，地域活動が取り組まれる背景が何かを見てゆく。特にここでは青年たちを，家族・職場・地域の中で自律的に生きる力量を身につけ社会的に自立しようとしているものととらえる。また，自立の基盤であるはずの地域が，現実には，いわば青年と疎遠な関係が進みつつあることを，青年からの聞き取りの範囲ではあるが，仮説的に示す。

第3章では，この青年と地域の疎遠な関係を，部分的にとは言え克服する過程を，笹川の枠組みを参考に明らかにし，しかし，そこでの「ゆきづまり」は地域との疎遠な関係が進行する中では重層的に表れ，自分の生活をふりかえり自分と青年団の関係をあきらかにするだけでは限界があることを示す。

続いて第4章では，訓青協における地域活動の展開を，青年からみた地域の位置づけ，地域と

の関わりにおける青年像に着目し，地域との疎遠な関係を克服して青年が住民諸階層とゆたかな関わりをもとうとする過程として明らかにする。

最後に，全体をまとめつつ，訓青協の活動から見た笹川の議論の限界についてもふれたい。

1）那須野隆一「現代社会と青年 ― 〈使いすて生活意識〉の浸透と克服 ―」，『教育』1977年9月

2）掛谷昇治「地域に生き地域を支えつづける青年団活動 ― 青研集会30年の到達点 ―」，『月刊社会教育』1985年7月

3）笹川孝一「青年の学習活動の基点をどこに求めるか ― 第25回全国青研が提起するもの ―」『月刊社会教育』1980年6月

4）元木洋「青年の地域活動とその活路」，泉信三編『青年の選択と現代』，大月書店，1982年。

5）三全総については，宮本・横田・中村編『地域経済学』，有斐閣，1990年，も参照。

6）なお，81年3月の第26回青研集会では，宮本憲一氏が記念講演に立ち地域の「内発的発展」を主張。これをもとに「地域づくり運動の理論が形成された」，第35回全国青研レポート集 p. 17。

7）第24回全国青研集会基調報告

8）第25回全国青研集会基調報告

9）日青協リーフレット『団員倍増運動のすすめ ― 青年団の限りない未来を求めて！』（青年団研究所『地域を織りなす仲間たち』，1985，より引用）

10）在村通勤青年の増加は60年代始めから指摘されていたが，全国青研参加者のうち，男子の職業は79年には農業31％，会社員22.5％であったのが，80年では農業21.5％，会社員25％と逆転している。

11）この10年の全国青研で，参加者数上位の分科会は次のように推移している。

1981①行事のあり方，考え方	1985①青年団と生きがい
②女子活動	②組織の活性化
③学習活動	③女子活動
④活動家養成	④住みよい地域づくりと青年団
⑤教宣活動	⑤平和運動
1989①組織強化・拡大	1990①地域づくり
②青年団活動と生きがい	②組織強化・拡大
③住みよい地域づくり	③青年期と生きがい
④女子活動	③青年期の成長と青年団活動
⑤上演・上映・鑑賞活動	⑤イベントの取り組み
	⑤女子活動

12）笹川孝一「青年団活動における地域づくり活動の展開」，青年団研究所編『地域にねざす青年たち』，日本青年団協議会，1983年

13）笹川「『成人の発達』分析のための作業仮説」，『日本社会教育学会紀要』No. 17，1981年

14）笹川「青年団活動と青年の自己形成」，『月刊社会教育』1981年9月号

第２章　農業・農村青年の自立の課題と地域活動

第１節　訓子府町青年団の組織と特徴

訓子府町青年団体連絡協議会（以下，訓青協と略）は，1990年度で会員数81名（うち女性24名），高校卒業後の18，9歳から20代後半の青年で組織されている。会員の職業は81名中農業（農業実習生を含む）が47名，公務員（保母，教員を含む）が16名，農協職員が９名などとなっている〈表２－１，２〉。

〈表２-1．２〉　平成２年度　訓青協会員の構成
（年齢別，職業別）

（人）

年齢	男	女	計
18	1	2	3
19	7	6	13
20	8	2	10
21	10	5	15
22	10	0	15
23	9	2	9
24	3	0	5
25	5	0	5
26	0	1	0
27	1	0	2
28	2	1	2
29	0	0	1
不明	1		1
計	57	24	81

（人）

職　業	男	女	計	
農　業	29	3	32	39.5%
酪　農	13	0	13	16.0%
実習生	2	0	2	2.5%
家畜商	1	0	1	1.2%
農　協	1	8	9	11.1%
公務員	8	8	16	19.8%
その他	3	5	8	9.9%
計	57	24	81	100.0%

（会員名簿より作成）

訓青協で取り組まれる活動は，スポーツ大会，演劇や意見発表を中心にした青年祭，冬期一泊研修のほか，町の行事である「ふるさと祭り」「さむさむ祭り」への参加，成人式や公民館まつりの手伝いなどがある〈表２－３〉。教宣活動では，月刊で広報紙『あっかんベェ』が，年度末には文集『郷土』が発行されている。

訓青協の基礎組織は６つの「単位会」である。訓子府町は訓子府市街を含め19の集落からなるが，現在の単位会は２ないし４集落（ポパイ単位会は市街地のみ）に住む10～15名前後の青年からなる〈表２－４〉。スポーツ大会や青年祭への参加，レクリエーション的な活動など，日常的な活動は単位会ごとに行われている。

訓青協と地域の関わりを組織の面から見たとき，この単位会の存在を特徴の第一にあげることができる。地域青年団は地域に居住している青年なら誰でも参加できるという性格を持っている。しかし市町村を単位に見た場合，地域青年の組織のしかたは，集落・校区などの分団・単位団に別れているもの，目的別のサークルが中心になっているもの，分団・単位団がなく全町一本の組織になっているものに分けられる。全町一本の組織になっているのは，単位団を組織するだけの人数がいないところがほとんどで，逆に単位団の存在は，それなりの会員数を維持していること

〈表2-3〉　平成2年度　訓青協の活動

月	単位会	訓　青　協	町	上　部　団　体	関　連　行　事
3		新人対策本部			
4	新人歓迎会	単位会訪問 体力測定(？) 年度始総会 ＮＨＫ北見放送局業務縮小に伴う署名 研修所大掃除 亀亀ＣＬＵＢ (組織機構研修)		訓子府に北青協事務局	春よ！恋・来いコンサート(町内アマチュアバンド主催・収益をたんぽぽ親の会に寄付) 統一劇場訓子府公演
5					
6	夏期大会参加	夏期体育大会 △「あっかんべェ」で「静寿園訪問記」連載（8月号まで）		北青協宿泊研修	たんぽぽコンサート(出演フォークス)
7	旅行 いかだ下り参加		ふるさとまつり	北青協夏期スポーツ大会 網青協夏期青年大会 網青協女子活動セミナー	
8		東北福祉大，名青連交流会	豊年盆踊り	北海道青年祭 全道青年大会	
9		△「あっかんべェ」で「暮らしの中の食品添加物」連載（3回）			
10		学習会「食生活と健康」		網青協オホーツクヤングコンベンション	
11	青年祭参加	臨時総会 訓青協青年祭		全道女子研	町文化スポーツ奨励賞
12	忘年会			北青協冬期大会	
1	新年会	一発芸大会	成人式	網青協冬期青年大会	
2		冬期一泊研修	さむさむまつり	網青協活動家育成セミナー	
3		文集『郷土』発行 年度末総会			常呂川流域ラウンドテーブル

(総会資料および文集『郷土』より作成)

を示すと考えてよい。また目的別のサークルは，活動の内容にもよるが，趣味・文化・スポーツなどのサークルでは，同じ地域―特に同じ集落に住んでいることが青年の要求を組織化する根拠であるという点は希薄になる。訓青協でも昭和40年代に同好のグループを中心にする活動が見られたが，青年学級を単位会ごとに持つなど単位会が学習と交流の場であることは変わりがなかった。だからこそ会員の減少は単位会の活動の困難として問題にされたのである。この点は後述する。

〈表2-4〉 単位会別構成（平成2年度）　（人）

単位会	柏丘	交友会	男爵	中の沢	ポパイ	南	全体
計	16	14	10	13	18	10	81
男	9	11	9	9	10	9	57
女	7	3	1	4	8	1	24
18～19歳	3	1	2	3	5	2	16
20～21	5	9	2	3	4	2	25
22～23	7	4	3	5	3	2	24
24～25	1	0	3	2	0	4	10
26～27	0	0	0	0	2	0	2
28～29	0	0	0	0	3	0	3
不明	0	0	0	0	1	0	1
農業・酪農	9	11	8	9	0	10	47
農協	6	1	0	1	1	0	9
公務員	0	2	0	1	13	0	16
その他	1	0	2	2	4	0	9

（会員名簿より作成）

訓青協で見られた同好のグループ活動には，畑作や園芸などの技術学習を行うグループがあった。こうした活動に影響を与えているものとして，青年学級のほかに，1962年の4Hクラブとの合併があげられる。これが第二の特徴である。もともと青年団と4Hクラブは，青年団は教育委員会，4Hは改良普及所が指導・助言を行うという縦割り関係でとらえられることが多かった。しかし，地域青年の減少と総合的・全人的な農業青年の育成という狙いから，訓子府町を含む北見地区では1960年代前半に津別町，留辺蘂町などでも青年団と4Hクラブの合併が行われている。訓子府で「自然消滅」していた4Hクラブが1978年に再建された際には，担当の社会教育主事は，農業青年が農業以外の青年や女性など多くの青年と交流を持てるようにと，青年団に入ることを4Hクラブ入会の条件にしている。

第三には，社会教育行政が青年団活動を側面から援助し，支えてきたことがあげられる。訓青協は社会教育関係団体（社会教育法第10条）として，教育委員会から物的な援助や指導・助言を受けている。1989年度の一般会計では，収入のうち会費19.1%，行事負担金37.3%，町交付金27.8%などとなっている。昭和40年代の学習活動では青年学級などの公的な機会に負うところが大きかった。また，青年たちの「たまり場」である訓子府町青少年研修館は，町の社会教育施設であるが，訓青協が鍵を預かり夜間は青年団が管理している。多くの青年団が仕事を終えて集まり仲間どうしじっくり語り合う場所が限られて苦労しているなかで，こうした例は数少ない。詳しくはふれられないが，ここには住民の活動に対する援助の原則をふまえたうえで，青年たちと職員の公私にわたるつきあいや議論の積み重ね，そこで培われた信頼関係があると言ってよい。青年たちが「たまり場」を獲得する経過については後述する。

第2節　青年団の活動基盤の変化

訓子府町は人口およそ7,200人，世帯数2,000足らずのうちおよそ570戸が農家という農業の町

である。このような中で，訓子府の青年団活動を支える基盤はやはり農業青年の存在にあったと言うことができる。何よりも訓子府の青年団は，終戦直後の一時期をのぞく1950年代から70年代まで，北海道の青年団の多くがそうであるように，農業青年を中心にした組織であった。

1967，68年度に訓青協の会長を務めた山本祐一氏によれば，当時の会員は中卒が多く，高卒の青年が入ってくるのは1970，71年頃であった。そのことを裏付ける適当は資料は残されていないが，『訓子府町町勢統計昭和62年版』によれば町内に1校ある中学校を1973年度に卒業した176人のうち，56％が高校へ進学，20％が就職し，そのうち42％（男子13人，女子2人）が農業に就いている。このような中卒農業青年の関心に応える活動として，レクリエーション・文化・スポーツ活動だけでなく，肥料の使い方や雑草の判定など農業の「基礎的なこと」（前出の山本氏）を，学習グループが企画し農業改良普及員が指導して学習する活動が行われていた。

しかし，〈表2－5〉のように1960年代後半には15～29歳の就業者のうち農業集業者は半数を割り，1985年には36.2％までになる。このように農業青年が減少し，したがって農村地域に住む青年が減少してくると，集落ごとに組織されている単位会の活動もこれまでのようにはいかなくなってくる。訓青協の活動の基盤の変化として，この単位会の変化を挙げることができる。

単位会は現在では2ないし4集落にわたる組織であるが，もとは各集落ごとの組織であった。訓子府町における集落組織は農事実践会と呼ばれ，行政区分としての集落と営農組織としての農事組合を1958年に統合したものである。この統合は，町開基60周年をきっかけに，凶作続きで落ち込んだ町の経済を立て直す新農村建設運動の一環として行われた。当時は18集落に64の農事組合があり，統合について「永年の伝統や感情から難行したこの事業も，青年層の目ざめからついに一部落一組合の統合に成功し」たとされている。こうした経過もあって，青年団は農協青年部などと共に各実践会の青年部として位置づけられていた（『訓子府町史』）。（もちろん，これ以前の青年団も，一般的に言えば集落との結び付きは深かったと思われる。）

しかし，会員の減少とともに1973年から単位会の合併が進められる。単位会の合併は，単位会

〈表2-5〉　訓子府町の青年の社会的構成の推移

年次	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990
総人口(A)	10,854	10,903	10,644	9,576	8,517	7,733	7,773	7,654	7,196
(前年次からの増減　%)		0.5	△ 2.4	△10.0	△11.1	△ 9.2	0.5	△ 1.5	△ 6.0
15～19歳	1,169	1,173	1,098	1,174	850	578	586	514	509
20～24歳	956	910	873	705	769	532	470	425	301
25～29歳	736	749	755	644	584	616	594	456	382
青年層計(B)	2,861	2,832	2,726	2,523	2,203	1,726	1,650	1,395	1,192
(前年次からの増減　%)		△ 1.0	△ 3.7	△ 7.4	△12.7	△21.7	△ 4.4	△15.5	△14.6
(対総人口比B/A　%)	26.4	26.0	25.6	26.3	25.9	22.3	21.2	18.2	16.6
Bのうち									
就業者(C)				1,666	1,544	1,086	1,054	832	
(C/B　%)				66.0	70.1	62.9	63.9	59.6	
農業就業者(D)				835	728	442	400	301	
(D/C　%)				50.1	47.2	40.7	38.0	36.2	
訓青協会員数	467	340	315	274	166	110	139	100	81
(対20～24歳層の比　%)	48.8	37.4	36.1	38.9	21.6	20.7	29.6	23.5	26.9

（各年度国勢調査および訓青協資料より作成）

と部落組織（実践会）との関わりを弱くする。もちろん各単位会は現在でも実践会から助成金を受け取り，地域の行事の手伝いを頼まれたりしている。しかし，学校時代の同級生や職場の仲間がいるという理由で自分の住む地域とは別の単位会に入る青年が出てきたことも併せて，単位会と実践会の関わりは弱くなってきていると言えるだろう。

また訓青協からみた単位会も，1981年に行われた次のようなの規約改正で大きく位置づけを変えている。

【旧規約】

第２章　目的及び権限

第３条　本会の目的は次の通りとする。

１）単位会がそれぞれの目的を達成する様，相互間の連絡協調を図る。

２）単位会の育成・助長に関する事業を行う。

第４条　本会の事業は次の通りとする。

１）連絡協調　　２）育成援助

３）町内的事業の実施　　４）上部組織に関する参加協力

５）その他目的事業の実施

【現規約】

第１章　総則

第２条　本会は訓子府町に住む単位会会員である青年を持って組織し，会員の自主的，民主的な行動と硬い連帯をよりどころとし，明るく豊かで有益な青年活動を目指すことを目的とする。

第２章　事業

第３条　本会は第１章第２条の目的達成のため次の事業を行う。

１．学習，文化，スポーツ，レクリエーションの活動に関すること。

２．各単位会の連絡協調並びに単位会育成援助に関すること。

３．町内における各行事への参加協力に関すること。

４．上部組織における各行事への参加協力に関すること。

５．その他，目的達成のために必要な事項。

すなわち，旧規約がそれぞれの単位会の目的の上に相互の連絡協調を図るとしているのに対して，現行の規約は，訓青協としての目的のもとで各種の事業を行うとしている。町全体に向けた行事に取り組む上で，訓青協としての活動の方向を明確にしておこうとしたものだと言えるが，実際の単位会の活動を見ても，この頃にはそれぞれの単位会での活動よりも訓青協全体での活動の方が比重が高くなってきていることがわかる。なお，単位会の活動の例として，1985年度の活動を〈表２－６〉に示しておく。

第３節　訓青協における地域活動の位置づけ

〈表２－７〉は1976年から1991年の訓青協の主な活動の推移を示したものである。「夏期体育大会」「ふるさと祭り」「さむさむ祭り」「青年祭」「新入会員研修」「冬期研修」の６つが80年代以降継続して行われており，活動の柱となっていることがわかる。これらの活動を昭和62年度の

〈表2-6〉 単位会の行事

単位会	活動
中の沢	新入歓迎会，ドライブ，フレンズ単位会と交流会，忘年会，新年会
柏丘	入団式，花見，ボーリング大会，ドライブ，収獲祭，忘年会，新年会，退団式
フレンズ	入退団式，花見，カーブミラー拭き，キャンプ，中の沢単位会と交流会，忘・新年会
ポパイ	歓送迎会，花火大会，海水浴，ルスツ高原ツアー，忘年会
藪原	入退団式，清住盆踊り，ドライブ，1泊旅行
交友会	入退団式，空かん拾いと花見，旅行，ボーリング大会，新年会
男爵	花見，ドライブ，忘年会，1泊旅行

（昭和60年度文集「郷土」17号より）

総会議案書は，「内部事業」「町協賛事業」「上部大会参加事業」の3つに整理し，「町協賛事業」には「ふるさと祭り」「さむさむ祭り」「盆踊り」を位置づけている。ここで「町協賛」とは町の行事に協賛し参加することを指しているが，議案書には「地域の活性化と訓青協活動のアピールのために積極的に参加したい」と，その主旨が述べられている。

また87年以降の活動方針を見ると，年によって違いはあるものの，①多くの仲間をつくろう，②自己を高めよう，③社会人としての自覚を持とう，④町民に訓青協の活動を知ってもらおう，の4つがほぼ共通しており，ここでも地域へのアピールが位置づけられている。すなわち町の行事への参加は，会員どうしの仲間づくりやスポーツ・文化活動にとどまらず，そうした活動や訓青協の存在を地域の人々にアピールするものとして位置づけられ，これらを通じて「社会人としての自覚」を持ち「自己を高める」ことを目指していると言える。

訓青協が活動の方針に「社会人としての自覚を持つ」ことを位置づけているのは，直接には会議・例会の際の時間厳守や，彼らのたまり場である町青少年研修館の使用の問題からきている。また，「社会人としての基本的なルールを身につける（昭和62年度総会議案書）」ことで，会員の家族や地域の人たちに“遊んでばかりいるのではない”ことを示したいというねらいもあり，それが「地域へのアピール」という方針になっている。

しかし，青年団活動そのものから青年たちの生活や労働に目を転じてみるならば，これらの方針の背景には青年たちが社会の一員，地域の一員として認められたいという自立の要求と，しかしそれが容易ではない現実を見て取ることができる。

第1に，青年たちを取り巻く農業の現実がある。訓子府の農業の現状については，別の機会に不十分ながら調査をふまえて，離農と規模拡大をくりかえすのか，地域ぐるみで経営の安定化を図るのかが問われていると指摘したことがある。しかし，各農家の対応は階層分解や経営形態の変更に規定され階層ごとに違ってあらわれている。共同化の取り組みも作業別，作目別のものになっており，農業を地域農業としてとらえにくくなっている。訓青協のリーダー層への聞き取りでも「共同作業がネックになっている。…（畑作）3品だけではできなくなっているが，それ以外のものは個人の問題だからどうしようもならない。メロンやめれとか言えない」といった発言が出ている。

第2に，こうした中で青年たち―特に20代前半の農業青年は，労働力としては重要な役割を果たしながらも，経営はまだ任されていないか部分的にかかわるのみで，経済的自立の途上にあ

〈表２－７〉　訓青協の活動の推移

	1976年	1977年	1978年	1979年	1980年	1981年	1982年	1983年	1984年
夏期体育大会(ソフトボール)	●	●	●	●	●	●	●	●	●
キャンプ	●	●	●	●					
夏まつり									
野菜即売会		○		○	○	○	○		
歌謡祭		○	○						
仮装盆踊り				○		○	○		
ふるさとまつり					●	●	●	●	●
サマーナイトファイヤー						○	○	○	○
いかだ下り									
みこしパレード									
ビールパーティー									
大コン激流昇り									
冬の祭典／さむさむまつり				●	●	●	●	●	●
青年研修所設置要求集会	●								
新青少年研修館誕生祝賀会									
青年大会／青年祭	●	●	●	●	●	●	●	●	●
芸能発表／舞台発表	○	○	○	○	○	○	○	○	○
意見発表	○	○	○	○	○	○	○	○	○
展示				○	○	○	○	○	○
その他	○ダンスパーティー、映画								
			○バドミントン						
ふれあい公演									
公民館まつり参加									
新入会員研修会							●	●	●
リーダー研修会							●	●	
冬期研修	●	●	●	●	●	●	●	●	●
講演	○			○	○		○		
ディスカッション	○								
討論会		○			○全体討論				
分科会				○	○		○		
国研報告会				○	○				
レク研修				○					
学習会									
単位会訪問				●	●	●	●		
町内酪農実習生との交流					●				●
道内青年との交流						●			●
						洞爺村			芦別市
道外青年との交流				●					
				福井県武生市ＣＹクラブ					
青年５団体意見交換									
実習大学生との交流									
上演活動									

	1985年	1986年	1987年	1988年	1989年	1990年	1991年
夏期体育大会(ソフトボール)	●	●	●	●	●	●	●
キャンプ	●		●	●			●
夏まつり							
野菜即売会							
歌謡祭							
仮装盆踊り	○	○	○	○	○	○	○
ふるさとまつり	●	●	●	●	●	●	●
サマーナイトファイヤー							
いかだ下り	○	○	○	○	○	○	○
みこしパレード		○	○	○	○	○	○
ビールパーティー		○	○				
大コン激流昇り				○	○	○	
冬の祭典／さむさむまつり	●	●	●	●	●	●	●
青年研修所設置要求集会							
新青少年研修館誕生祝賀会							
青年大会／青年祭	●	●	●	●	●	●	●
芸能発表／舞台発表	○	○	○	○	○	○	○
意見発表	○	○	○	○	○	○	○
展示	○	○	○	○	○	○	○
その他							○紙飛行機大会
ふれあい公演		○					
公民館まつり参加			○		○	○	○
新入会員研修会	●	●	●	●	●	●	●
リーダー研修会							
冬期研修	●	●	●	●	●	●	●
講演	○	○	○				
ディスカッション	○パネルディスカッション					○	
討論会							
分科会				○		○	
国研報告会							
レク研修							
学習会			●	●			
単位会訪問	●	●		●		●	●
町内酪農実習生との交流							
道内青年との交流			● 風連町				● 新十津川町
道外青年との交流		● 茨城県関城町 兵庫県青垣町			● 茨城県関城町		
青年5団体意見交換			●	●			
実習大学生との交流			●	●		●	●
上演活動			○本間ひとし	○劇団風の子	○東家夢助、猿舞座		

(総会資料および文集『郷土』より作成)

る。そのなかで不安定な経営を補うため，あるいは「自由に使えるお金」を求めて，農外就労を行う青年，農業を離れてゆく青年も少なくない。農業青年にとって地域は，自らの経済的・社会的自立の基盤として映らないのである。「町づくりと言っても大きな事になるから，青年でできることは少ないのでないか。訓子府で活性化なんてないんだから，誰がどうしたからどうなるわけでもない」という発言も，こうした事情から出ていると思われる。

第3に，農業青年が少なくなり，多くの青年が地域の外に職を求める中で，学校時代を共に過ごした仲間集団は，高校卒業の時点でいったんバラバラにならざるを得ない。地域に残った青年たちや地域に帰ってきた青年たちは，日々の労働と個別的な余暇の過ごし方の中では孤立しかねない状況にある。多くが生まれ育った地域に愛着を持ちながら，地域がよそよそしいもの，外の世界に比べてつまらないものに見えてくるのである。東京の大学を卒業して農業を継いだ青年は「訓子府に帰った頃は，俺は大学出だからここでなくても暮らせたと思っていた」と言い，札幌の女子短大を卒業した青年は，入団1年目の文集に「地元に戻ってきたものの，畑と家の往復で友達も少なく，これといった楽しみもなく，平平凡凡な日々……。何か違う，刺激がないじゃないっ，こんなのイヤダっ!!」と書いている。

青年たちの仲間づくりや地域の一員として自立の課題は，こうした現実を部分的にでもつくりかえることによって進んでゆくであろう。

第3章　青年団活動への意識化とリーダーの成長過程

青年と地域の疎遠な関係ともいうべき事態が進みつつある中で自立の課題を抱えた青年たちが，青年団の中でまず出会うのは，笹川も指摘するように「自分を大切にしてくれる仲間や先輩」であり，「みんなで協力してひとつのことをなしとげること，集団のなかで自分の能力が認められること」への感動である。

ここでは1990年に行った訓青協のリーダー層への聞き取り調査から，青年団活動を通じた自らの成長をふりかえり，活動に意識的にとりくむようになるリーダーへの成長過程を分析する。聞き取り調査の対象として，訓青協の各単位会から4，5名ずつ，執行部，広報部，実行委員長，単位会長の経験者を任意に選んだ。対象者の属性などは〈表3〉に示す。発言に続く丸数字は，この表に示す対象者の番号である。

第1節　リーダーへの成長過程

(1)　入団以前

聞き取りからリーダーたちの進路選択・職業選択の過程を見ると，独立した生活への志向と都市的な職業・生活への憧れをないまぜにしながら，農業を続け，この町に住み続けることへの不安や葛藤が表れている。

「大学いくとき，(農業を継ぐか継がないか) どっちにするか曖昧だった。高卒の時，郵政とかほかの就職も決まっていた。でも結局親に言われたからやったのかも知れない。農家が好きになるかは，自分が経営してからでないとわからないと思う。今はロボットみたいにあれやれこれやれで，おもしろくない。営業マンとか会社だと1年毎に変わる。下っ端使ったり，考えながらやる。農家は幅広いから考えるよりついていくのがやっと。農業以外に憧れる。」(⑩)

〈表3〉

	性別年齢	団歴	単位会	主な役員経歴	学　歴	職　業		備　考
①K.S	男 26	83-89	中の沢	87単位会会長	北見	農業	12ha 畑作・酪農	85年一時退団 87 4H会長
②O.F	男 26	8	男爵	単位会会長，88副会長	訓子府高卒	家畜商		
③I.M	男 26	8	南	86青協副会長，87単位会長 88青協会長，90北青協会長	訓子府高卒	農業	5ha 玉葱、メロン	高卒の時，母が事故でケガ
④S.A	女 25	7	南	85単位会長，87青協副会長 88全道女子研実行委員長	訓子府高卒	農業	15ha 畑作	あとつぎは弟
⑤N.A	男 24	7	柏丘	90青協会長	訓子府高卒	農業	11ha 畑作，豚	90 4H会長
⑥M.K	男 28	85-89	中の沢	87青協会長，88道女子研副実行委員長	明治大学法学部卒	農業	25ha 畑作	
⑦Y.H	男 27	6	ポパイ	87執行部事部局長，88広報部長，88単位会長，全道女子研事務局長	東北福祉大卒	町役場総務課		図書館司書で就職
⑧H.Y	男 26	6	南	87青協副会長，88青年祭実行委員長，89青協会長	道農大校卒	農業	19ha 畑作・酪農	90年結婚　長女誕生
⑨S.T	男 25	6	中の沢	87執行部事務局，90単位会長	置戸高校卒	農業	5ha 畑作	91 4Hに入会
⑩N.T	男 24	4	柏丘	89単位会長，町づくり実行委員長，90青年祭実行委員長	道農業大校卒	農業	14ha 水田・畑作	
⑪O.A	男 23	4	中の沢	89単位会長，90北青協事務局長	道農業大校卒	農業	9ha 水田・玉葱	長男は他出
⑫O.S	男 22	4	南	90単位会長	北見柏陽高卒	農業	11ha 畑作・酪農	父は事故で2級障害
①S.M	女 22	4	交友会	88執行部事務局	訓子府高卒	訓子府農協経理電算課		兄は青年団のOB
⑭H.K	男 24	3	柏丘	89広報部，90執行部事務局長	帯広畜産大別科卒	農業	24ha 酪農　110頭	学卒後1年間米国で研修
⑮O.M	女 22	2	男爵	90広報部	藤女子短大卒	農業	9ha 畑作	90母死亡

日本青年館・青年団研究所が1989年に行った青年アンケート調査は，全国の自治体から9地点を抽出しているが，郡部調査地点のひとつとして訓子府町が取り上げられている。これを見ると，「私が住んでいる地域に，なにか働きかける活動をしてみたい」に「まったくそう思う」「まあそう思う」と答えたものが全体で45.6％なのに対して，訓子府では57.5％と最も高くなっている（『青年問題基本統計報告書』）。上述の地域生活をめぐる葛藤を積極的に解決したい，「住みたくなるまち」「住み続けることのできるまち」をつくりたいという志向の表れと見てよいだろう。

しかし青年たちの地域活動への志向は，アンケートでの回答の高さにもかかわらず顕在的なものではない。また，青年団が自分たちの抱えている問題を積極的に解決しようとする場であると理解されている訳でもない。多くの青年は，農業を選び地域に残れば入団は当然と思って，あるいは友だちや先輩に誘われてなんとなく入団している。

なお，入団動機にかかわって，特に80年代末に入団した者に「訓子府に帰っても友だちもなく寂しかった」ことや「知らない人ばかりで始めはイヤだった」ことを挙げているものが少なくないことに注目しておきたい。地域生活をめぐる葛藤や地域活動への志向は，何よりも，地域で暮らしてゆくことを支えあう仲間づくりの欲求としてあらわれていると言えよう。

(2) 青年団の「入口」

「青年団の入口」体験は，ここではさしあたり，青年団への“仲間入り”を果たす，とでも言うべきものであろう。地域での仕事・生活をめぐって様々な不安はあるものの，少なくともそこにいる間は，自分がまわりに認められ，安心していられる，そのような場をもつことである。

青年団への“仲間入り”は，単に先輩が声をかけ，仲間にいれるというだけでなく，何か役割を分担したり，活躍した場面や話合いの中で出された意見をとらえ，それが評価されることでより確かなものになる。

このような感動したり周囲に認められた経験をもとに，さらに先輩に誘われて，あるいは自ら進んでそのほかの行事，活動にも参加するようになる。

(3) リーダーへの成長

活動を通じて得た感動や楽しかった経験を，自分からすすんでつくり，より多くの仲間に保障しようとすることが，リーダーとしての成長の第一歩であろう。

この場合，役員だけがリーダーではないことは言うまでもないが，団員の減少や，団員の高学歴化などによる活動期間短縮の傾向のもとでは，リーダーとして進んで参加するようになることと，役につくことは，ほぼ重なっている。

第2節 リーダーの「ゆきづまり」

しかし，こうした過程は，次のような点につきあたる。

(1) ほとんどのリーダーは，青年団に入ってよかったこと，楽しかった経験をもとに会員への働きかけを行う。しかし，会員の経験を積極的に評価することを位置づけられずにいると，やがて活動を離れていく会員が出たり，会員の組織化に失敗したりする。行事など“場の設定”だけでは会員の積極的参加を引き出すことは困難になり，活動を通じて会員の個性が発揮され，要求が実現されることを意識的に追求することが求められるようになる。

「今年は会長ということで，一年間がんばって来たつもりであるが，なかなかうまくいかない面が多かった。

まず新人の介入[ママ]である。わが男爵単位会は一人しか入らない。五人ぐらいの人に介入を求めたが『仕事がいそがしい』などの理由で入ってもらえなかった。又，三月いっぱいで一年しかたっていない人もやめていった。理由は『時間のルーズ』『何のためにやるか』などの理由であった。いったい青年とは，何であるか，わかって入っている人がいるのだろうか。又，何のために青年に入るか，みんなはわかっているのだろうか。」(②，86年度文集)

「(2年目に) 副実行委員長をやってたとき。…思うとおりに行かなくて，青年ってなにをするとこなんだろうと思ったり。本当の目的は何なんだろうという意識が高まった。人それぞれ考えがある。それをどうやってまとめたらいいか，わからなくなった。キャンプに人が集まらないとか。」(⑩)

(2) イベントなど町の行事へ参加し，他団体とも連携するようになった段階にあって，活動に参加しやすい条件をつくり，会員の個性や要求を引き出すことは，それを会員相互の働きかけや青年団の行事の中だけで満たすには間に合わなくなっている。

「4団体との関係は，…我慢できないときがある。会議の進め方とか早いから。さむさむではまただーっと決まりそうだったから，ストップかけて，下の方に話もっていきたいからって。…一緒にやると青年が下働きになる。」(⑤)

「研修所で遅くまで集まって，腹減ったからってラーメン食いに行ったり飲みに行ったりする。そしたら，たまたまそこにのみにきていた親父さんが，青年団いっつも来てるな，こいつら酒ばっかり飲んでと，普通思う。でも彼らは今まで活動して腹が減っている。決してただ飲んでいるわけでない。でも黙っていればそういうふうに見られて損だ。そうじゃないというとこで，どんなふうに伝えて行くか。」(⑨)

(3) 清住地区の盆踊りや90年度の青年祭の例が示すように，地域の産業・労働・生活が青年団活動に与える影響は大きい（前者は乳価の低落と酪農家の小麦導入によって労働時間が増え，担い手がいなくなったとされる例。後者は長雨の畑作への影響によって演劇等の練習時間が少なくなった例)。会員の状況をつかみ，個性や要求を引き出すことを，こうした影響と切り離してとらえることは，やがて青年団活動を表れた限りの青年の要求で組織することにつながる。

「会員の状況は，…呼掛けに応じてくれる人はつかみやすい。それ以外の人をつかむのはむずかしい。リーダーの力量が云々でなくて，個人の考え方になる。1回でも2回でも，とにかく出てくれないと。それにもならない人を，必要以上にあれこれいったら，その人は嫌になる。」(⑧)

(4) これらの点はリーダー自身にとっても，リーダーになることが自分の欲求を抑えることのように思われたり，イベントへの参加が動員主義的・下請け的なものに感じられたり，したがって，活動を続けることが自由な時間を奪うもの，あるいは経営に本腰をいれるまでの一時的なもののように感じられることとしても表れている。

「自分の趣味の時間が取れない。行事が終わって，やっと時分の時間が取れるときは『やった！』と思う。それは喜び方が違う。副会長をやった61年から，休みを決めて取っている。昔は役員はびっちり出ていて，よくやるなと思っていた。」(③)

「実行委員長なら言いたい放題言えない。みんなの話を聞いてそれをまとめる役だから。気楽にやったら楽しくなるのに，上にたったら欲求を押さえて，ストレスをためている。」(⑩)

第3節　リーダーとしてのあゆみ

「生活史学習」や「自己形成史学習」は，このような点につきあたったリーダーが，笹川孝一の言い方を借りれば「自分（たち）が青年団活動をすることは，自分やなかまの人生にとって，日本国民と人類の歴史にとってどんな意味があるのか。そのような意味を充たす青年団活動は，

どんなものであるべきなのか」を明らかにし，学んでゆく学習活動であると言える。鈴木敏正も「自分史・生活史学習」は「より直接的に自己意識の自立化を目的とする学習実践」であり，「その共通した目的は歴史の中での自己認識」であると位置づける。

訓青協の活動はこうした学習活動を位置づけてはいない。したがってリーダーたちの「青年団活動をすることにどんな意味があるんだろう」という悩みは，仲間どうしの語り合い，他市町村の青年団との交流や実践記録，青年団に関する書籍など限られたなかでしか「普遍化」されない。しかもそれは自然発生的であり，リーダーの成長過程に位置づけられ，意識的に行われている訳ではない。

とはいえ，活動の中で困難につきあたった時に，青年団活動での経験を自らふりかえることで自分の成長を確認し，仲間にも意識的に働きかけようとする過程は，訓青協のリーダーたちからも見いだすことができる。特に青年たちが毎年文集を発行し，ほぼ全員が原稿を書いていることが活動をふりかえる機会を与えている。

②は単位会長を務めた86年度の文集で，入団して1年にも満たない会員が「何のために青年団活動をやるのかわからない」とやめていったことに対して次のように書いていた。

> 「自分は青年とは何か，何のために青年団として活動しているのかはっきり言って，理論的にはわからない。しかし自分なりに考えた時，一つの行事，又，一つの目標が，達成されたときに思う感動，みんなで力を合わせ，目標達成までがんばった行程などが，青年団としての活動であり，感動であるのではないだろうか。」

③は「本当は自分で1から10までやりたい」のがわかってからは，「あまり自分が言わないようにしている。でも，みんな一生懸命やればいいのになと思う」と言う。彼が訓青協会長になったときのスローガンは，「待つだけじゃチャンスは来ない」であった。当時あるテレビ局の宣伝に使われていた一節であるが，会員一人ひとりが積極的に活動することを期待してのことであろう。

⑧は③の次に訓青協会長に就いたが，「人の変わりが激しくて，守りに入っていた」とし，対外的なことよりも「青年団の輪の中にいかに人を取り込んでいくか」で苦労したと言う。青年団に入ってよかったことも，昔は内気な少年で学校時代は目立てなかったが，青年団はちょっとしたことで自分の隠れていたものが引き出されることだと言う。

⑩は入団2年目にスポーツ・レクリエーション実行委員会の副委員長を務めて以来，翌年には町づくり実行委員長，翌々年には青年祭の実行委員長を経験した。新入団員の時には町づくり実行委員，女子ソフトボールのコーチ，講談師・宝井琴梅を呼ぼうという琴梅企画など，初めてのことばかりでとにかく楽しい1年だった。2年目に副実行委員長になったとき，実行委員長が女性だったこともあって「俺が動かなきゃ」とはりきったものの，なかなか思うようにいかない。

> 「思うとおりに行かなくて，青年ってなにをするとこなんだろうと思ったり。本当の目的は何なんだろうという意識が高まった。人それぞれ考えがある。それをどうやってまとめたらいいか，わからなくなった。」

3年目の町づくり実行委員会ではほとんどがその年に入団した会員だったこともあって，なかな

か人が集まらないなど，夏のふるさと祭りはうまくいかなかった。

「どうして失敗だったのかみんなに（意見を）求めた。今度は喧嘩腰の議論になって，それをさむさむ祭りに生かしたら，さむさむ祭りは成功だった。それで感動してやめられなくなった。…新人は自分が入ってきたときと同じで不安でいる。それがわかった。そこで人の気持ちを考えなきゃいけないと思った。…コミュニケーションをとるだけで違う。意見が出ればやりやすくなる。」

会員同志のコミュニケーションを図ることが大事だという視点でほかの行事・活動を見渡してみると，例えば総会では休憩の間にいろいろな話が出てきて，お互いの悩みが聞けるなど気が付かないところで有意義に使っている。それを会議に生かせないだろうか。そんな問題意識を持っているのである。

第4節　小　　括

これまで見てきた過程は，青年団のリーダーたちが，なによりも自分自身が青年団でどんな経験をしてきたのか，そのことにはどんな意味があり，仲間にもそうした経験を保障するためにはどうしたらいいかを意識的にとらえる過程であった。さきに述べたリーダーが活動の中でつきあたる点に照らして見るなら，主には第1の点，すなわちこれまでの経験にのみたよって会員の積極的参加を引き出せずにいた困難を，表面的な活動の方法などではなく，そのなかで自分自身が何を感じどう成長したかをふりかえることによって克服してゆこうとするものである。

しかし，第2，第3の点をこうした過程のみで克服するには限界があるだろう。なぜならこれらの点を克服するには，自分自身へのふりかえりを超えて，自分（たち）と地域の人々とが地域の行事や生産・生活の活動を通じてどのように関わっているのか理解することが求められると思われるのである。

第4章　地域活動の展開過程

ここでは，訓青協における地域活動の展開過程を，進行しつつある青年と地域の疎遠な関係を克服しようとする過程として意味づけてゆく。

すでに見てきたように，青年と地域の疎遠な関係は，青年にとって地域を自らの経済的・社会的自立の基盤としてとらえ難くするものとして，地域の生産・労働や生活条件に規定されて進行しつつある。それは，家族以外ではもっとも身近な社会である仲間集団をもバラバラにし，青年を孤立させかねない。青年団活動は，仲間との働きかけあいを通じた成長を意識的に行うことを可能にし，青年の仲間集団からの孤立を克服するところにひとつの意義がある。

かつては網羅的な地域青年集団であり，また青年期における固有の要求とされる社会的自立の要求をもった青年たちの活動は，地域の行事へ参加したり地域の人々に働きかける活動を行っている。しかし，地域との疎遠な関係が進行しつつある中では，地域のとらえ方や実際の活動における矛盾から活動は困難にならざるを得ない。しかも地域との関係には，すでに見たように地域全体が抱えている生産・労働や生活の課題から仲間集団の問題までいくつかの局面がある。そのそれぞれの局面における困難を克服しようとするところに地域活動の展開があり，そのなかで，青年たちは自分たちと地域の関わり，地域における自らの位置づけを深めてゆくと考えられる。

〈表４〉　地域活動の展開過程

活　　動	住民との関わり	地域の位置づけ	自己の捉え方
研修所問題 (1974-78)	青年団に対する住民の理解と交流	宣伝（・啓蒙）の対象としての地域	町の将来を担う青年
さむさむ祭り ふるさと祭り (1979-)	住民参加の行事から町ぐるみの行事へ (青年５団体で実行委)	地域の一員としての青年団	同じ町に住む青年どうし
ボランティア活動 上演活動など (1987-)	住民諸活動への参加と青年活動への住民参加		(多様な住民諸階層と関わる青年)

いま，この過程を訓青協の地域活動に即して図式化すると〈表４〉のようになる。以下，これに沿って活動の展開を追って行こう。

第１節　研修所問題と宣伝・啓蒙の対象としての地域

訓青協の会員数は，1965年ごろには300名弱であったが，71年にはその半分の150名に，76年には100名を割るようになる。いきおい，これまで通りの活動では成り立たず，単位会での「課題解決学習」など活動の強化が模索されていた。

いっぽう町教育委員会でも，各単位会の申請で開設されていた青年学級への参加者が減少していることから，団体リーダー養成と農業後継者育成を中心とした講座に力が入れられるようになる。こうした昭和40年代の行政側の動きに対する青年たちの反応を，訓青協30周年記念誌は次のように記している。「リーダー養成グループ主体による活動等青年全体の主体性を無視したような社会〔教育〕行政の青年に対する取り組み方に不満の意を表わす会員も現れ出し，青年の教育委員会から独立的傾向が徐々に表われ出した。」（〔　〕内は筆者が補う）

こうしたなかで起こったのが，1974年に始まる青年研修所問題であった。1958年に建てられた旧青年研修所は，新農村建設事業の一環として農協所有の土地に町が建てたものであった。この施設を，青年との話し合いや了解のないままに町が農協への移管・研修所の廃止を決めたのが，事の発端である。新しい研修所を設置してほしいという青年たちの要求は，当初は町に受け入れられなかった。そればかりか青年と町側の交渉の中で，現在の青年団は生産に結びつく活動，学習活動や町民にアピールする活動が少ないとの指摘をされる。

「生産に結びついた青年活動」との考えは，当時の青年たちには「時代錯誤」に見えた。青年たちの要求はむしろ「農業を始めあらゆる分野に渡る学習等を発展させていく核としての青年研修所」であり，「明日を語り，友を作りあえる核としての青年研修所」であった。76年９月の研修所設置要求集会では，このような研修所の必要性を町民に訴えてゆくこと，青年団内ではそうした訴えができるよう学習をし，また町民の理解を得られるよう活動を充実させることが確認されている。こうした運動の結果，78年には訓子府町青少年研修館が建設された。設計にあたっては青年たちも図面にペンを入れ，また，夜間の使用については訓青協が優先されるとの覚書も，訓青協と町教委の間で交わされている。

研修所設置運動は，いわゆる地域課題をとらえた活動とは区別される，青年団の独自な組織課題である。しかしそれを公的な施設として要求していることから，署名活動など地域住民の理解

を得るための活動が行われている。ここでの地域のとらえ方は，自分たちの活動について理解されていない，自分たちの活動のために理解を得るよう訴えていかなければならないという，訴えかけや宣伝の対象としての地域というふうに見ることができる。「研修所設置要望書」〈資料4－1〉では，「青年活動の沈滞」は「青年の都市流出」「農村の過疎現象」に拍車をかけるものとして，青年団活動と地域の関わりを位置づけている。しかし，行政のリーダー養成や後継者育成などを「青年全体の主体性を無視した」ものとし，「生産に結びついた青年活動」とのとらえ方を「時代錯誤」と見ていたという点から言えば，要望書で青年団活動と地域の関わりを位置づけているのは，行政を納得させるための論理であるように思われる。

すでに述べたように，訓子府の青年団活動の主要な舞台が単位会から訓青協へ，集落レベルから町全体のレベルへ移りつつあったこの時期に，市街地の青年を含め自らを「この町の次代を担う青年」ととらえたことは，説得のための論理とは言え，青年と地域の関わりに対する理解を深めてゆく過程として積極的な側面である。実際に市街地青年の単位会を組織するのは1979年のことであるが，ここで青年たちは「青年団に娘を入れると農家の嫁にやらなければならない」という町民の声があることを知る。自らを「町の次代を担う青年」ととらえたもの，実際には農家自身も娘を農家に嫁がせたくないという農業の現実があり，市街地住民と農家のあいだの無理解や「冷やかな関係」があって，市街地を含めた町全体を活動の基盤とすることが阻まれている。この点を克服することが次の課題となる。

〈資料4－1〉青年研修所設置要望書（昭和51年8月13日）

昭和33年，当町に於ける農業振興（新農村建設）の一端として建設された青年研修所が昭和50年3月を以って町から，その土地所有者である農協へと移管されたことにより私たちの青年活動に於ける核が同時に失なわれてしまった。以後私達はそれに代わる暫定的施設として旧四十物住宅を青年研修所として提供された。

しかし，それは本来個人住宅であり，百余名の会員を持つ一団体が研修所として使用するには，余りにもその役割を満たせ得るものではなく，且つそれが暫定的なものであり，今だに決定的なものが示されていない段階に於いて私達青年がここに青年研修所の設置の要望をすることは然るべきことと思います。

近年の全国的な青年の都市流出等による農村の過疎化現象は，農業を基幹産業としているここ訓子府に於いても例外ではありません。

青年活動の沈滞は正にこれを拍車をかけるものと思われます。

又，これに加え，訓子府高校の道立移管に伴う農業科の廃止は若者の農業に対する意欲の減退につながり，且つ農業後継者の経営技術および生産技術修得等の実質的な欠如につながることは明らかであります。

これらの問題を解消する意味に於いて，又，私達の郷土の発展を考えた時，この町の次代を担う青年育成の為にも青年研修所の設置は意味深いものであり，その果たす役割は非常に大きいものであると思います。

青年が組織活動を通じて仲間意識を向上させさらに農業を始め，あらゆる分野に渡る学習等を発展していく核としての青年研修所の建設は必須であります。

又，当町における青年活動の将来を予測したとき，当然市街地青年との関■を十分考慮しなけ

ればならないと思います。

すると，その活動が一本化したとき，この青年研修所の持つ価値は今以上計りしれないものになる事は必至です。

よってここに青年の自主性を持った活動が可能な研修所として左記の条件を満たした青年研修所の設置を強く私達は要望いたします。

記

一．全会員が研修できる面積を持つもの
一．青年が自主性を保ち使用できるもの
一．使用時間については活動を疎害する制約を受けないもの
一．青年の活動が地域住民に害を与えることがないもの（車の出入り等）
一．研修所設置に当たっては青年の意向を充分尊重し，取り入れること

以上

訓子府町青年団体連絡協議会
会員一同

（訓青協広報紙「あっかんベェ」1989年10月号，11月号より，■は不明）

第2節　イベント活動と地域の一員としての青年団

前述の市街地住民と農家の関係は，問題をそのものとしてとらえれば，それぞれの階層が農業をどう見ているか，という問題になろう。しかし，それが青年団の問題としてあらわれている限りは，農業問題を学習の入口にすることにはつながりにくい。むしろ，イベント活動のように，一時的にでも農民や市街地住民といった立場の違いを超え，同じ町に住む者どうしとしての一体感を生み出そうとする活動が取り組まれるのは，自然なことのように思われる。

市街地青年組織化の経験をふまえて出された「もっと町民に青年の活動を知ってもらおう」という方針は，町民と青年がふれあう場をつくろうという方向で，1980年2月の「冬の祭典」として具体化した。商工会青年部や各種サークルにも呼びかけ，協賛を得て開催された「祭典」では，青年たちの手作りの雪像が披露され，子ども運動会などが催された。好評を得た冬の祭典は「観光資源」として町に取り上げられ，82年2月の第3回から町の行事として開かれることになった。そこで訓青協は，商工会青年部とともに，前年に発足した町産業観光振興協議会（以下，振興協議会と略）を中心とする実行委員会のメンバーとして「祭典」にかかわることになったのである。

青年たちにとってこの「昇格」はうれしいことではあった。しかし，自分たちの発想で自由にやっていたものが，金を出してもらうとなるとそうもいかなくなる。とは言え，行事が大きくなり金銭的な負担も大きかったことや，第2回の祭典では参加した子どもが雪像から落ちてけがをしており，万一の時の責任をどうするかという問題もあって，町（実行委員会）主催にせざるを得ない状況にあった。

このような中で，町の行事への取り組みが青年たちにとって積極的な意味をもったのは，町や他の青年団体とのかかわりの中で，青年団としての立場を明らかにしていったことにある。冬の祭典改め「さむさむまつり」と夏の「ふるさとまつり」は訓青協，商工会青年部のほか，農協青年部，農協職員組合青婦部，役場職員親睦会青年部の「青年5団体」による実行委員会で運営されるようになり，これらの団体との連携も深めつつあった。そこへ降ってわいてきたのは，振興

協議会への加入要請だった。総会などで議論した末，青年たちはこんな結論を出した。それは，振興協議会は「青年団の活動とは基本的に異なる点が多」く，自分たちは「損得ではなく，町民の方々との理解・交流を深める意味で」各行事に参加する，というものだった。祭りの取り組みの過程で青年たちは，町や振興協議会，そこに参加している人々がどんな立場で祭りに取り組もうとしているか，見極めようとしていたのだろう。その結果が，組織の利益のためではなく，同じ町に住むものどうしの「理解・交流を深め」たいという答えであった。

しかし，いわば主観的に設定された「同じ町に住むものどうし」という立場が，客観的に存在する互いの立場の違いを理解し，認めあったうえのものでなければ，何らかの形で矛盾が噴き出してくることも予想される。実際，深刻な対立ではないにしろ，青年たちからは，「内輪の行事はいいけど，町との絡みになったら大変だと思う。…ほか（の団体）から見ればやっぱり若僧のように見られている。全体通しては自分たちがやっているというのがなくて，遠慮している部分があるのでは」「一緒にやると青年が下働きになる」「各団体で盛り上がって結局バラバラになっている。もっとみんなで作り上げるものがあってもいい」などといった意見が出されている。青年たちが作り出した活動でありながら，必ずしも主体的な取り組みとして受け止められていないことがうかがわれる。そのことはまた，「自分たちが楽しくなければ」という意識にもつながり，1982年に「ふるさと祭り」への参加のために恒例のキャンプを取りやめにした経過から，「青年本来の活動を忘れ，そういった行事ばかりに参加するのはおかしい」との声が会員から上がることにもなる。こうして，会員一人ひとりの要求を重視した活動ができるようにと，実行委員会方式が活動の中に位置づけられることになる。

第3節　実行委員会方式と住民諸階層との交流

イベント活動のなかで生まれていた「行事をこなすだけの傾向」への反省から会員一人ひとりが行事を創ろうと，87年度からは，それまで行事ごとに組まれていた実行委員会を年間の活動として位置づけた。例えば，夏のふるさと祭り，盆踊りと冬のさむさむ祭りは「町づくり実行委員会」が担当する。「学習・研修実行委員会」であれば，「会員個々の持つ悩み，要求をとりあげ，地域・生活に密着した事業の学習・研修面の企画・運営を一年間を通し行」う（87年度始総会議案書）という具合いである。それは当時の会長によれば「事業・行事を学習的に企画し運営する」ことを意図していた。ただ複数の行事を担当するのではなく，ひとつの行事の経験を次に生かしながら，目標をもって取り組めるようにしようということであった。

年間を通した実行委員会体制によって，2つの祭りへの参加では，同じメンバーが参加するので対応しやすい，話し合いが深まるといった経験が生まれている。こうした中で，イベントに参加する団体どうしの横のつながりを持とうという動きも一部には見られる。しかし，地域との関わりを深めるという点で一定の成果をあげているのは，これまでのイベント活動とは別の，上演活動やボランティア活動である。

上演活動は，ここ数年では講談の宝井琴梅，劇団風の子，落語の東家夢助，猿まわしの猿舞座などの公演が取り組まれている。たいていが年間の行事予定が埋まっているところに教育委員会から話を持ちかけられるため，訓青協としてよりも会員有志によることが多い。取り組みのなかでは，前座と称して自分たちも出演するなど「まず自分が楽しむ」ことが意識されている。また，一方では出し物に応じてお年寄り，親子連れなど呼びかける町民の的を絞ることで，町民一般ではない多様な人々との交流が行われている。

これを，主観的に設定された「同じ町に住むものどうし」という立場から，多様な人々との交流を通じて「同じ町に住むもの」と言っても実際には様々な人々がいることを客観的にとらえ，その多様な人々が抱える問題に具体的に関わってゆくことで地域の中に自らを位置づけようとする過程として見ることができる。それはまた，他者に働きかけることを通じた自己確証と他者と関わり合うことを通じた相互承認を，統一して行おうとする営みと言える。

もっとも，こうした意味づけは，青年たち自身には必ずしも意識されてたものではない。しかし，住民諸階層との交流は，有志による上演活動や一部の青年のボランティア活動にとどまらず，訓青協の活動の中に定着しつつある。そのことは，これまで観客として地域住民の参加が期待されながらも，あくまで内部事業として取り組まれてきた青年祭に，住民の参加を位置づけ，紙飛行機大会を催し成功させた1991年の取り組みが示している。

また，住民諸階層との交流は，前に述べた自分自身をふりかえる過程を，より深めるものにもなっている。1987年度の学習・研修実行委員会の活動と「たんぽぽ親の会」との交流はそうした例である。「たんぽぽ親の会」は，訓子府で障害児をもつ親たちが交流し学び会う場として1986年に発足した。翌87年，会は障害者と健常者が楽しみながら同じ問題を考える場として「たんぽぽコンサート」を企画し，訓青協に協力を依頼した。これに対し青年たちは「障害とか福祉とか言われてもわからない，役員の中で説明して欲しい」と，まず親の会の代表と訓青協の役員が話し合う。その後，学習・研修実行委員会が学習会を企画，6月に親の会代表と保健婦を迎えて「身体障害者問題を通して自分の健康を考える」と題した学習会が開かれた。そのうえで青年たちはコンサートのチケット売りなどに協力，コンサートは大成功に終わった。また，こうしたつながりを機に，9月には「望まない妊娠をしないために」と題して2回目の学習会も開かれた。

この年の活動をきっかけに，訓青協全体でも会員のボランティア活動への参加や，機関紙での「静寿園（町内の特別養護老人ホーム ― 筆者注）訪問記」「暮らしのなかの食品添加物」の連載など，福祉や健康問題への関心が広まりつつある。今のところ，この分野での活動の展開は見られない。しかし，1991年に行われた学習会「食生活と健康」について，「どうやって改善していくかといったら，自分で食事作っているわけじゃないから親に言うしかない」という意見があるように，生活実践と結びついた活動が求められるまで，自分自身をふりかえる過程が深められていると言うことができるだろう。

まとめと今後の課題

訓子府の青年団活動が自分たちの活動を「地域にアピール」し，「社会人としての自覚を持つ」ことを位置づける背景には，青年たちが社会の一員，地域の一員として認められたいという自立の要求がある。しかし，現実には青年と地域との疎遠な関係ともいうべき事態が進行していると考えられ，青年の自立を困難にしている。しかもそれは，農業青年に即して見れば，地域全体の生産・労働や生活が抱える問題，経営の中での不安定な地位，仲間集団がバラバラになり孤立しかねない状況，というふうに重層的に表れている。1970年代までの実践をふまえた笹川孝一の「活動家の自己形成」論は，こうした視点を欠いているために，活動家がつきあたる「ゆきづまり」を実践における特殊性と一般性をよりわけられないことからくるものとして一様に描き，「個別課題への取り組みから地域づくりを正面にすえた活動へ」という方向性を指摘しながら，地域づくり活動の青年の成長にとっての独自な意義をとらえられなかった。

那須野隆一のいう「生活史学習」や笹川のいう「自己形成史学習」を，自分自身をふりかえり，

青年団活動を含む「自らの生活実践を具体的に分析」する学習と理解するなら，その過程は不十分ながらも訓青協におけるリーダーの成長過程にも見いだすことができる。また，それが不十分なものであるのは，生活史学習や自己形成史学習において強調されている社会科学の学習や歴史学習，啓蒙の役割が活動の中に位置づいていないことによるのだろう。しかし，訓青協のリーダーがつきあたるのは，①自分自身の経験にのみ頼って，一人ひとりの会員がもつ個性を引き出したり，要求を実現することができないという困難だけでなく，②地域の中で青年の活動が理解されていなかったり，地域の行事で青年が下働き的になって主体的に取り組めないということ，③地域の生産・労働・生活の現状の中で一人ひとりの青年が抱えている課題をつかみきれず，表れた限りの要求で組織してしまうこと，④これらの点からリーダー自身も活動を続けることが自由な時間を奪うもの，農家の経営に本腰を入れるまでの一時的なもののように感じていること，などである。

自分自身や自らの実践をふりかえる過程は，こうした困難の克服，特に活動を通じた自分自身の成長を確かめ，仲間にも意識的に働きかけようとする（上述の①の克服）うえで一定の役割を果たす。しかし，地域との疎遠な関係が進行する中では，自分自身をふりかえる過程だけでは困難の克服には限界がある。自分と地域の関係，すなわち地域の中で自分と地域の人々がどのように関わっているかを見直し，部分的にせよその関係を作り替えてゆくことが必要になるのである。

訓青協の活動が単位会から訓青協へ，集落レベルから市街地を含む町全体を視野にいれたものに移りつつあった段階において，青年と地域の関係を見直すきっかけになったのは研修所問題であった。青年団活動に理解のない地域の人々は訴えかけや宣伝の対象であり，町の将来を担うものとしての青年像がこれに対置される。しかし，市街地青年を組織しようとしたとき，青年と地域住民を対置したままではゆきづまらざるを得ない。

そこで，一時的にでも農民や市街地住民といった立場の違いを超え，同じ町に住むものどうしとしての立場に立とうとするイベント活動が取り組まれる。しかし，そのようないわば主観的に設定された立場は，客観的には様々な立場の違いがあることと対立する。商工会青年部や農協青年部などとつくっているイベントの実行委員会は，青年たちには主体的に取り組める場として受け取られていなかった。ここでは「同じ町に住むものどうし」という建前をいったん離れ，一人ひとりの要求を重視した活動や，住民諸階層の様々な立場を理解し合うことが求められた。

訓青協の会員やその有志グループが取り組む上演活動やボランティア活動には，地域には実際様々な人々がいることを客観的にとらえ，その多様な人々が抱える課題に具体的に関わっていこうとする契機を持っている。

以上のように訓青協の地域活動は，活動の基盤が変化する中で青年と地域の関わりが見えなかった状態から，同じ町に住むものどうしとしてイベントに取り組むことを介して，青年たちが地域の一員として，多様な住民諸階層と関わってゆくものとして展開している。こうした住民相互の豊かな関わりの中で，青年たちがさらに自らの生活実践を具体的に見直してゆくなら，青年たちの成長を地域の一員，すなわち地域住民としての成長としてとらえることには限界が生まれるものと思われる。そこではおそらく，青年の成長過程を農民や労働者としての成長過程としてとらえることになるだろう。

しかし，ここで検討してきた地域活動の展開過程や青年の成長過程は，理論の面でも実証の面でも不十分なものと言わざるを得ない。今後は特に次のような点を深めてゆきたいと考えている。

ひとつは，本論の課題に接近する視点として示した「青年と地域の疎遠な関係」とその克服に

ついてである。ここでは訓子府の事例をもとに仮説的に示したに過ぎないし，疎遠な関係の進行を展開過程として示せていないために，地域活動の展開も必然的な過程として示すことができていない。理論的に整理することがまず必要であるが，その際，すでにわれわれが持っている「主体形成論的社会教育学」の枠組みに学ぶなら，青年と地域の関係を自己疎外の展開のなかで理解することになろう。

二つには，訓子府で見られた地域活動の展開とその意味づけを普遍化してゆく課題である。この点は，青年団活動の全国的な動向と照らして吟味したい。

最後に，これらをふまえて，地域活動を通じた青年の成長過程を明らかにすることである。その際，青年団活動だけを見るのではなく，それを地域の諸活動，地域づくりや自己教育の諸実践のなかに位置づけることが必要になると思われる。